

千刈狸の呟き

～ はばぎぬぎ 一百宅挽歌 ～

孫七狸

「数年に一度」のはずの強い寒波が再三列島を襲った今年の1月、市の文化交流館カダレで写真展が開催された。市内在住の方が長年通い続けて撮った鳥海地区の百宅（ももやけ）集落のもので、縁浅からぬ地がダムに沈むとあって早速訪れてみた。会場では意外に多くの来場者が写真の前に佇んでじっと見入ったり、久々の再会なのか話の輪があちこちに出来ていた。何故かその場の雰囲気は静寂でも、まして同窓会的なざわつきでもなく、しみじみ感とでも言おうか「お疲れ様でしたね」とお互いを労うかのような穏やかなものであった。多くは鳥海地区の、それも集落ゆかりの方々なのだろう、恰も「はばぎぬぎ」のような。旅を終え、やっと帰り着いた我が家、はばき（脚絆・脛あて）を脱いでやれやれと。つまりは慰労会・打ち上げである。

鳥海ダムの計画そのものは昭和30年代に始まったらしく、秋田県の予備調査の開始が昭和45年、じつに半世紀に及ぶ紆余曲折を経て3年程前に建設段階に移行した。集落の名の通り一時は百を超える世帯があり、法体の滝も今ほど知られておらず、平家の落人伝説もある山奥の豪雪地で多くの方が暮らしを営んでいたが、今は30世帯を割るまで減ってしまった。高度経済成長の陰でダム建設の話が拍車をかけ、さらには昭和49年には鳥海山が噴火、のちの災害避難用の新しい道路は逆に人の流出を促すような皮肉な結果となった。

「百宅小中学校閉校式・昭和59年3月」との看板の前で20数名の緊張の面持ちの子供たちが写った一枚があった。その写真の前にじっと立ち尽くす人々。昔日の「わたし」がそこにいた。辺りはまだ多くの残雪。冬は厳しく決して楽な暮らしではなかったろうけど、夫々の事情で心ならずもこの地を去って長い旅の末、辿り着いた「我が家」とはかつての百宅なのだろう。ホッと一息、まずは一献。大変でしたなあ・・・

ダム予定地は集落のはずれ、鳥海川に架かる吊橋を渡った河原一帯で原野が広がり、嘗て耕作地（入会地？）があったという。30年ほど前に鳥海町の診療所に勤めていたこともあり、釣りや山菜採りで年に2、3回は訪れているが、吊橋が雪の重みで壊れた時は膝上までの渡渉を強いられたこ

ともあった。3年前の初夏、この地でかつての住人3名と出会った。10年以上前に集落を出て本荘に住み、年に一度は連れ立ってワラビ採りに訪れるという。かつての畑の段差に座ってしばらく昔話に花が咲いたが、1人の老人が色々あったけど、ここで耕作した日々は一番の宝だと言い、愛しそうに傍らの地面をポンポンと叩いた。

そして秋田県内で熊による死者が出た一昨年、うだるような暑さが続いた夏に鳥海の知人から聞いた話。ダムの地質調査の人から熊の目撃情報があり、檻を設置したところ一頭の熊がかかった。ほどなく近くに住む人がポリバケツを持って吊橋を渡るのを見かけて尋ねたら、この暑さでは熊も熱中症でゆるぐねべ（大変だろうから）、と水を掛けに行くのだと言う。近々駆除される運命であっても尚、この地で生きるもの同士として深く敬意を払っているのだ。ここの人々は風も土も全てを受け入れて地道に生きている。

ところで「私はシンラバンショウに詳しいわけではないので」働き方改革関連法案のいい加減なデータ処理を突っ込まれた安倍首相の答弁だ。相変わらず言葉への敬意がない。森羅万象とは全ての事象の成り立ちのこと、うその釈明なぞに使用してほしくないのだが。モリカケ問題始め、政・官の劣化は目に余り、改ざん・隠蔽何でもアリ、李下の冠・瓜田の履もなんのその、厳しく追求されると激昂するか居直るかしてきちんと答えない。政権の座にある人々に決定的に欠けているものがリスペクト。言葉もルールも、そして国民への敬意も感じられない。要するにナメている。時間が経てば国民は忘れろと。地上イージスの配備候補地に山口と秋田が「最適」だというのも、首相と官房長官のお膝元なら文句も出ないだろうと思っていないか。地位にしがみついて足元が疎かになり、「はばき」がとれて馬脚を現した。

先日、久々に百宅の地を訪ねてみた。重機に縦横無尽に均されて妙に明るくなったダム予定地に高さ81m、堤長365mの巨大構造物が10年もたてば出現する。国策ならば、と諦めて立ち去った人々の家も学び舎も畑も全て、人工物の水底に沈む。